

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

- 翻訳についての断章 山岡洋一
 - ー 19世紀の翻訳と20世紀の翻訳
中村正直訳『自由之理』と塩尻公明・木村健康訳『自由論』を比較して、明治の初めから100年で翻訳がどう変わったかを考えてみたい。

- 私的ミステリ通信（第9回） 仁木めぐみ
 - ー ホームズは時空を超える！？
ホームズ特集後編。いまや一つのジャンルとなっているパスティシュの世界を紹介する。

- 近刊書の紹介 山岡洋一
 - ー 柴田耕太郎著『翻訳力練成テキストブック』
翻訳のために限らず、英語を学びなおしたいすべての人のための本、柴田耕太郎著『翻訳力練成テキストブック』を紹介する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

19 世紀の翻訳と 20 世紀の翻訳

前回、中村正直訳『自由之理』（1872 年）について触れた。原著者のジョン・スチュアート・ミルは 19 世紀のイギリスで活躍した著者であり、中村とほぼ同時代の人物だ。経済学に興味のある人にとっては古典派経済学の完成者だし、哲学に興味のある人にとっては功利主義の哲学者だし、政治に関心のある人にとっては『自由之理』の原著、On Liberty の著者だ。つまり、この時代に相応しく、森羅万象を考えようとした思想家であった。ミルの著作はいまでも古典として読みつがれており、この On Liberty も、塩尻公明・木村健康訳『自由論』（岩波文庫）を簡単に入手できる。

塩尻・木村訳は 1971 年に出版されているので、中村正直訳より 99 年後に刊行されている。中村訳と塩尻・木村訳を比較すると、明治の初めから 100 年で翻訳がどう変わったかを知るうえで絶好の資料になる可能性がある。

塩尻・木村訳が出版された経緯が、吉野源三郎による「あとがき」にくわしく書かれている。岩波文庫で『自由論』の新訳を計画したのは 1938 年だったという。日中戦争の最中、第 2 次大戦が始まる前の年である。この時期に自由について論じた本の翻訳出版を計画し、しかも当初は河合栄治郎に翻訳を依頼したというのだから驚く（河合栄治郎は自由主義者だと批判されて大学を追われ、起訴されている）。塩尻訳の出版は 1971 年だが、翻訳の時期が戦争中だったので、戦後に文語体の文章を口語体に改めるのに時間がかかったという。自由の大切さを説いたこの本を戦争中に訳していたというのだ。

それはともかく、訳文をみていこう。まず前回にも紹介した中村正直訳『自由之理』（1872 年）の第一章冒頭部分を今度は段落全体にわたって引用し、つぎに同じ原著を訳した塩尻公明・木村健康訳『自由論』（1971 年）を紹介する。中村訳は片仮名で読みづらいという意見もあるだろうが、平仮名にする方法はとらなかった。塩尻・木村訳はこの種の翻訳でごく普通に使われていた文体なので、比較的読みやすいと思う。

中村正直訳『自由之理』、序論

リベルテイ〔自由之理〕トイヘル語ハ、種々ニ用

ユ。リベルテイ ヲフ ゼ ウーイル〔主意ノ自由〕（心志議論ノ自由トハ別ナリ）トイヘルモノハ、フーイロソフーイカル 子セスシテイ〔不得已〔ヤムヲエザル〕之理〕（理學家ニテ名ツケタルモノナリ、コレ等ノ譯後人ノ改正ヲ待ツ。）トイヘル道理ト反對スルモノニシテ、此書ニ論ズルモノニ非ズ。此書ハ、シヴーイル リベルテイ〔人民ノ自由〕即チソーシアル リベルテイ〔人倫交際上ノ自由〕ノ理ヲ論ズ。即チ仲間連中（即チ政府）ニテ各箇〔メイ／＼〕ノ人ノ上ニ施行フベキ權勢ハ、何如〔イカ〕ナルモノトイフ本性ヲ講明シ、并ビニソノ權勢ノ限界ヲ講明スルモノナリ。○自由トイエル事、顯然タル議論ノ題目トナリシ事ハ、古ニアラザレドモ、人世ノ事蹟ニ於テ、政府ト人民ト、コレヲ得ントテノ争ハ、古代ヨリ隱然トシテコレアリシナリ。世道ノ開化ニ進ムニ至リテ、ソノ事マス／＼顯ハレ、自由ノ情形〔アリサマ〕自〔オノズカ〕ラ新タニナリタレバ、コノ道理ノ原由ヲ講明セザルベカラズ。（『明治文化全集』第 5 巻、日本評論社、7 ページ、傍点は太字で示した）

塩尻公明・木村健康訳『自由論』、第一章 序説

この論文の主題は、哲学的必然という誤った名前を冠せられている学説に実に不幸にも対立させられているところの、いわゆる意思の自由ではなくて、市民的、または社会的自由である。換言すれば、社会が個人に対して正当に行行使得る権力の本質と諸限界とである。この問題は、一般的に述べられたことは稀れであり、また一般的に議論されたこともほとんどないが、それが潜在していることによって現代の実践的論争に深甚の影響を及ぼしており、また、やがては将来の最も重要な問題と認められる可能性のある問題である。これは、新奇な問題どころではなくて、ある意味においては、ほとんど最古の時代から、人類を二分させて来た問題である。しかしながら、今日比較的文明の進んだ部類の種族においては、この問題は新たな諸条件の下に立ち現われて、これまでとは違った、一層根本的な取り扱いを必要とするのである。（岩波文庫 9 ページ）

John Stuart Mill, On Liberty

THE subject of this essay is not the so-called 'liberty of the will', so unfortunately opposed to the misnamed doctrine of philosophical necessity; but civil, or social liberty: the nature and limits of the power which can be legitimately exercised by society over the individual. A question seldom stated, and hardly ever discussed in general terms, but which profoundly influences the practical controversies of the age by its latent presence, and is likely soon to make itself recognized as the vital question of the future. It is so far from being new that, in a certain sense, it has divided mankind almost from the remotest ages but in the stage of progress into which the

more civilized portions of the species have now entered, it presents itself under new conditions and requires a different and more fundamental treatment. (Penguin Classics, p. 59)

戦争中にこの本を訳すこと自体が大変なことだったので、塩尻・木村訳を安易に批判するわけにはいかない。だが、塩尻・木村訳を読むと、訳語が決まり、訳し方が確立して、翻訳がいかに効率的になったかが実感できるはずである。たとえば、中村正直が「不得已〔ヤムエザル〕之理」として「後人ノ改正ヲ待ツ」とした *philosophical necessity* は、「哲学的必然」と訳されている。これ以外の訳語を容易には思いつかないほど、自然な訳ではないだろうか。

もっとはっきりしているのは *social* や *society* だろう。中村が使った「人倫交際上ノ」はありえないし、「仲間連中（即チ政府）」はおそらく、「誤訳」の一言で片づけられるはずだ。塩尻・木村訳はもちろん、「社会的」「社会」と楽々と訳しており、誰が訳してもこれ以外にはありえないといえるほどである。

だが、翻訳というものの性格を考えるなら、中村正直がおそらくは七転八倒のすえに考えだした訳語にも、捨てがたい魅力がある。じつは、この段落の後に、中村正直が長い訳注をつけている。また片仮名かと嫌われるのを覚悟のうえで引用しておこう。じっくり読むに値するすばらしい訳注だと思うからだ。

本文ニイヘル仲間〔ナカマ〕連中ニテ、一箇〔ヒトリ〕ノ人ノ上ニ施シ行フ權勢トイフ事ハ、下ヲ讀テ自〔オノヅカ〕ヲ知ラルヽ事ナレドモ、荒増コヽニ説クベシ、○國中惣體ヲ一箇〔ヒトツ〕ノ村ト見ル。村中ニ家數〔ヤカズ〕百軒アルト見ル。コノ百軒ノ家ハミナ同等ノ百姓ニテ、貴賤ノ差別ナシ。然ルウヘハ、銘々安穩ニ暮〔クラ〕サルヽヤウニ、家業ヲ出精シ、ソノ他〔ホカ〕心ノ欲スルニ従ガヒ、自由ニ何ニ事ニテモ為シ、利益ヲ得テ宜シキ道理ナリ。固ヨリ他人ニ屬シ、コレガ指揮ヲ受ベキ理ナク、マシテヤ、他人ニ強〔シヒ〕ラレ、吾ガ本心ノ是〔ヨシ〕トスルモノヲ行ヒ得ザル理ナキ事ナリ。サレドモコノ百軒ノ家ハ、互〔タガ〕ヒニ持チ合ヒテ一村トナリタルモノニシテ、タトヒ銘々壇那〔ダンナ〕ノ權〔カブ〕（自由ノ權）アリ、自由ニ己〔オノレ〕ガ便利ヲ謀リテ宜シキ譯〔ワケ〕トハイヒナガラ、村中総體ノ便利ヲモ謀ラザルベカラズ。或ハ、鄰村ヨリ盜賊ノ襲ヒ入ル事モアレバ、相互〔タガ〕ヒニカヲ合セテ、コレヲ防ガザルベカラズ。サルカラニ申シ合セテ、百軒ヨリ、毎年少々ヅヽ金錢ヲ出シ、村中總入用トナシ、年番ヲ立テ、五六軒ニテ、仲間ヲ組ミ、村中ノ事ヲ取り扱カヒ、ソノ總入用ノ中ヲ以テ、或ハ橋ヲ架〔カケ〕シ、川ヲ浚〔サラ〕ヒ、道普請ヲ為シ、或ハ相應ノ武器ヲ備ヘ、或ハ凶年ノ為

〔タメ〕ニトテ米穀ヲ蓄〔タク〕ハフ。コレ租税ノ姿ナリ。又村中ニ人ヲ殺スモノアリ、仲間連中ニテ評議シ、カヽル人ヲ赦シオカバ、惣體ノ害トナルベシトテ、コレヲ刑罰ニ行フ。コレ刑法院ノ姿ナリ。抑モ年番ニアタル仲間連中ハ、村中守護ノ役目ヲ持〔モテ〕ル事ナレバ、固ヨリ村中ノ事ヲ裁判スル權アリ。サレド、コノ權ガアマリニ強クナルトキハ、一箇ニテ自由ニ事ヲ行フ事ノ妨トナル事ナレバ、仲間連中、即チ政府ニテ、一箇〔ヒトリ〕ノ人ノ上ニ施コシ行フ權勢ノ限界ヲ論定スルハ、人民ノ福祉ヲ増シガ為メニ、一大關係ノ事トハナリタルナリ。

原著は、個人の自由を *government* との関係だけでなく、*society* との関係でもとらえるべきだと論じているので、*society* をどう訳すかは決定的な意味をもっている。そこで中村正直は、「仲間連中」の意味を解説しておく必要に迫られたのだろう。この訳注は、当時の「社会契約説」に近く、いまの「モデル」に近い方法を使って、*society* を当時の読者に理解できる言葉で解説したものである。いまの言葉でいうなら……、「国がもし百軒の村だったら」だ。

国が百軒の村だったら、百軒がみな同等に「壇那〔ダンナ〕ノ權〔カブ〕（自由ノ權）」、つまり相撲の年寄り株のような「株」、株仲間の「株」をもっている、各自が自由に行動できるわけではない。村を守るために協力する必要があるし、税金を負担して道路などの公共施設を作り維持する必要もある。犯罪があれば裁判も必要になる。こうしたことを担当する「仲間連中」が「政府」であり、「仲間連中」が各人の自由をどこまで制約できるかが問題なのだと中村正直はいう。「国がもし百軒の村だったら」と考えて、*society* の意味を解説したのである。

塩尻・木村訳の時代には *society* は「社会」と訳すしかないと言われるようになっていた。他の訳語はありえない。だから、中村正直のように苦勞することはなく、*society* の意味をとくに考えなくても翻訳ができたともいえる。少なくとも、考えても考えなくても訳語は変わらなかったはずだといえる。

戦争中にいわば命懸けで『自由論』を訳した塩尻公明が、*society* の意味を考えなかったとは思えないが、敗戦の後、何をどう訳そうが、そのこと自体で投獄される恐れなどなくなった段階では、事情が違っていたはずだ。考えても考えなくても訳語が変わらないのであれば、考えるだけ無駄だと思うのが人情というものだ。いわば機械的に訳語を割り当てても不安を感じないのが普通だろう。翻訳という観点からは、これはきわめて危険なことだ。

ために、society がどのような意味なのかを考えてみるといい。たとえば、community と society は意味が同じなのか違うのか。何と馬鹿げた質問をするのかと思うかもしれない。言葉が違うのだから意味が違うに決まっているのではないかと。だが、言葉というものはそう簡単ではない。その証拠をあげてみよう。

それ故に、愛国者たちの目的は、支配者が社会の上に行使することを許された権力に対して制限を設けることであった。(塩尻・木村訳 10 ページ)

サレバ、コノ時、國ヲ愛シ民ヲ助クル義士、オモヘラク、カク人民ノ安カラザルハ、君主ノ權ニ限界ナキユエナリ、今ヨリハ、君主民ヲ治ムルノ權ニ、限界ヲ立テ定ムベシト。(中村訳 8 ページ)

The aim, therefore, of patriots was to set limits to the power which the ruler should be suffered to exercise over the community; (On Liberty, p. 60)

しかるに、やがて、民主的共和国は地球表面の大きな部分を占めるに至り、自らを諸国民から構成される社会の最も有力な成員の一つとして感ぜられるに至った。(塩尻・木村訳 13 ページ)

今ハ民治ノ國、尤モ勢力アル人民ト稱セラレ、地球上ノ大分ヲ占ル事トナリ、(中村訳 9 ページ)

In time, however, a democratic republic came to occupy a large portion of the earth's surface and made itself felt as one of the most powerful members of the community of nations; (On Liberty, p. 62)

このように、塩尻・木村訳では community が「社会」と訳されている。つまり、community と society は意味が同じだと解釈されているのである。当然ながら中村正直は community を「社会」とは訳していない。「民」「人民」という訳語を使っている。

では、この「人民」という訳語を中村正直がどう使ったかをみていくと、次のような例にぶつかる。

今ハタゞ擇ベルトコロノ君主ノ志願ヲシテ、人民ノ志願ト同一ナラシメ、君主ノ利益ヲシテ、人民ノ利益ト同一ナラシメレバ可ナリ。(中村訳 9 ページ)

今や求められていることは、統治者が人民と団体となるべきであるということであった。即ち、統治者の利益と意思とが、国民の利益と意思でなければならぬということであった。(塩尻・木村訳 12 ページ)

What was now wanted was that the rulers should be identified with the people, that their interest and will should be the interest and will of the nation. (On Liberty, p. 61)

このような用例をみていくと、society は community と nation と同義語ではないかと思えてくる(手元のシソーラスを引くと、どちらも society の同義語にあげられていた)。そしてもうひとつ、people も同じ意味なのではないかと考えるのが当然である。

もちろん、society = community = nation = people という等式が成り立つわけではない。言葉というものはそう簡単ではない。この4つの語には意味が重なる部分があり、原著者がこれらの語を、重なる部分の意味で使った可能性があるというだけである。

だが、たとえば nation と society とで重なる部分の意味とは何なのか。こう考えると、「社会」という訳語があるからといって、society という語に安心してられないことが実感できるのではないだろうか。この語の意味が曖昧になり、あやふやになって、困惑するのではないだろうか。

たぶん、このような不安を感じれば、中村正直の偉大さも理解できるようになるはずだ。辞書があり、簡単に訳文ができるからといって、原文の意味がわかるとはかぎらない。中村訳から 99 年の後に出版された塩尻・木村訳が、原文を忠実に訳した翻訳だと思えるとしても、中村訳より優れているとはかぎらないのだ。訳語が決まり、訳し方が決まって、「正確さ」と「効率性」の面では大きく進歩したように見えても、原著の意味をどこまで訳書の読者に伝えられているのかという観点から評価したときに、たしかに進歩しているとは断言できないのだ。

杉田玄白は『蘭学事始』で、『ターヘル・アナトミア』の翻訳をはじめたときの感想として、「誠に艦艫〔ろかじ〕なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋〔ぼうよう〕として寄るべきかたなく、たゞあきれにあきれて居たるまでなり」と書いている(杉田玄白著『蘭学事始』岩波文庫、38 ページ)。翻訳とはまさにそういうものだと思う。原文の表面は簡単に分かって、意味をほんとうにつかめているかどうかは分からない。意味が理解できたと思っても、ごくごく表面の部分しかつかめていないかもしれない。高速エンジンと GPS を備えていると思うから間違えるのであり、そもそも「艦艫なき船」なのだと思えば、少なくとも自己満足に陥る愚は避けられる。

それはともかく、society に話を戻そう。19 世紀にこの語を訳すのは容易ではなかった。中村正直がこの

語に苦闘したことは、『自由之理』の訳注を読めばよくわかる。同じ時期に福沢諭吉がこの語に苦闘したことは、『文明論之概略』を読めばよくわかる。

だが、明治も半ばになり、20世紀に入ると、「社会」という訳語が定着し、中村の「人倫交際」や「仲間連中」など、福沢の「人間交際」などの訳語は使われなくなった。このあたりの事情は、柳父章の名著『翻訳とはなにか』（法政大学出版局）と『翻訳語成立事情』（岩波新書）にくわしい。

『翻訳語成立事情』の第1章「社会」には「societyを持たない人々の翻訳法」という副題がついている。当時の日本には、個人を単位とする幅広い人間関係がなかったと柳父は指摘する。つまり、societyという概念がなかっただけでなく、その概念の裏付けとなる現実がなかったという。だから、「社会」は「世間」や「世の中」などとは違って、見聞きでき、実感できる具体的な内実を欠いた言葉であった。具体性とは切り離された抽象的な概念、それが「社会」だという。

「仲間連中」や「人間交際」「世間」「世の中」などではなく、「社会」という訳語が定着した背景には、意味内容がほとんどない抽象的な言葉に魅力があるという事情があったと柳父は指摘し、この魅力を「カセット効果」と名付けている。カセットとは宝石用の小箱のことだ。中に宝石が入ってなくても、美しい装飾で人を引きつけるという。おそらく、人間には抽象的な言葉を好む本能が備わっているのだろう。子猫がボールにじゃれつくように、子供は言葉で遊ぶ。まず言葉を覚え、意味がわからなくても、言葉という玩具を使えることだけで大喜びする。

「社会」という言葉にはそういう魅力があった。日本にはないもの、はるかに遠く、はるかに進んでいて、理解することなどとてもできない理想の状態をあらわす言葉だと受け止められたからだ。「社会」という言葉が身近な現実と接点をもつ機会は一とつしかない。それは、欧米という理想を基準にして、日本の遅れを嘆くときである。日本は遅れていて、みな上下関係にしばられており、個人の平等の関係が成り立たないのだから、そもそも社会といえるものがないという具合に。この結果、「社会」という言葉は自分の周囲にある現実を遅れたものとして切り捨てる手段にはなっても、現実を現実としてとらえ、分析する際の道具にはなりにくくなった。

このような言葉としての「社会」が society の訳語として定着するようになって、中村正直や福沢諭吉ら

の巨人が「艦舵なき船」で欧米の知識という大海に乗り出すために苦闘した時代は終わった。20世紀になると、訳語という艦、訳し方という舵が整備されるようになって、翻訳の主役は巨人から秀才に変わったといえるかもしれない。

その結果、中村正直のように、原著にある society という言葉の意味をひとつずつ考え、それぞれの文脈にふさわしい訳語を探す方法は好まれなくなった。そして中村訳の『自由之理』に対しては、society という重要な概念、キーワードをいくつもの訳語を使って訳したのでは、society の意味がわからなくなるという批判がだされるようになっていく。こう批判した人たちは、原著者のミルが society を community や nation や people などに言い換えている事実をどう考えていたのだろうか。原著者が言い換えているのに、訳者がいくつもの訳語を使ってはならないという理由があるのだろうか。いまの時点にたてばこういう疑問がわいてくるのだが、当時はそうは考えなかったようだ。

なぜそう考えなかったかという、欧米の知識という大海に乗り出すのに、艦と舵があるだけの小舟を使うしかなかったからだ。はるかに遠い欧米、はるかに進んだ欧米、理解することなどとてもできない欧米を、ごくわずかでも理解するには、たとえば society のように、日本にはないと思える言葉と概念を手掛かりにするしかないと思えたからだ。言葉に対する物神崇拜ともいえる感覚、言霊信仰ともいえる感覚が、20世紀の翻訳の特徴だった。

たぶん、塩尻公明と木村健康が『自由論』を訳した戦争中から戦後初期にかけては、20世紀型の翻訳が成立する条件が残っていた最後の時期なのだろう。戦争中には「社会」「自由」「個人」などの言葉は危険だとされていたし、戦後初期にはまだ、欧米ははるかに遠かったからだ。

21世紀に入ったいま、翻訳をめぐる状況は大きく変わったと思える。たとえば society についていうなら、個人を単位とする幅広い人間関係がないとはいえない状況になっている。はるかに遠い欧米、はるかに進んだ欧米、理解することなどとてもできない理想を言い表す言葉としてではなく、もっと身近な現実を分析する手段として、society などの概念を考え直すことができるようになっていくはずである。この点についてはいずれもっとくわしく考えていきたい。

ホームズは時空を超える！？

「シャーロック・ホームズ」という名前をから、まず何を思い浮かべるでしょうか？ 鳥打帽をかぶってパイプをくわえた横顔、ガス灯、辻馬車など 19 世のロンドンの風景、「初歩的なことだよ、ワトソン君」というせりふ。あるいは NHK で放映していたシリーズドラマの主演俳優ジェレミー・ブレットの顔という方もいらっしゃるかもしれません。特にファンではない方でも、ホームズの名前を聞けば、おそらくなんらかのイメージを持たれるのではないのでしょうか。それは Doyle が作り上げた世界がとても印象的であり、小道具の使い方なども含めて、とても完成度の高いフィクションだったからだと思います。

そしてイメージがはっきりしているがゆえに、後世の人々は自分でもホームズ物語を創作してみたくなるのだと思います。またホームズ譚はうまいぐあいに想像の余地を持たせてくれるというか、「ツッコミ」どころの多い世界でもあるので、人々の創造意欲を嫌でも刺激してしまうのかもしれません。

というわけで第8回「シャーロック・ホームズの基礎知識」に続き、今回は Doyle の手を離れて変幻自在、縦横無尽に活躍するホームズ、つまりホームズのパロディやパステイシュ（模作）を、アンソロジーを中心に紹介していきたいと思います。

☆

☆

ホームズのパステイシュという私がまず思い浮かべるのはロバート・L・フィッシュのシュロック・ホームズ・シリーズ（『シュロック・ホームズの冒険』ほか・深町真理子訳・ハヤカワミステリ文庫）です。これはシャーロックならぬシュロック・ホームズが、「ワトニイ」博士と共に事件に取り組む短編集なのですが、シュロック・ホームズは稀代の「迷探偵」であり、勘違いを連発し続けるのです。正典を完全に笑いのめしているドタバタ系パステイシュです。

まじめなところではジョン・ディクスン・カーとエイドリアン・コナン・Doyle の合作『シャーロック・ホームズの功績』（大久保康雄訳・ハヤカワポケットミステリ）を思い出します。これは Doyle の評伝『コナン・Doyle』も書いている本格ミステリ界の大御所カーが、Doyle の息子エイドリアンと合作したという夢のようなパステイシュです。

もう 1 冊有名どころをあげるとすると、エラリー・クイーン『恐怖の研究』（大庭忠男訳・ハヤカワミステリ文庫）でしょうか。ある日エラリー・クイーン

（もちろん作者ではなく、同名のシリーズ探偵のほうです）のもとにワトソンの未発表原稿が送られてくるという設定です（パステイシュではとてもよく使われる設定です）。その原稿には、ホームズと同時代の犯罪界の「花形」切り裂きジャックの対決が描かれました。果たしてジャックの正体とは！？ 私たちと一緒に原稿にひきこまれていくエラリーの様子がなかなか微笑ましく、ホームズ・ファン、エラリー・ファン、そしてジャック・マニア（？）の三者ともに楽しめる作品です。

☆

☆

次にパステイシュの流れを変えたエポック・メイキングな作品を紹介しましょう。ニコラス・メイヤーの『シャーロック・ホームズ氏の素敵な冒険』（田中融二訳・扶桑社文庫）です。

この作品の原題は 7% Solution というのですが、「7%溶液」とは何かと言うと、ホームズが退屈になると注射していたコカインの濃度なのです。ホームズの時代のイギリスでは、コカインは有害ではあるものの、煙草より少し悪い程度の嗜好品とみなされ、非合法ではありませんでした。しかも通常は 10% で使うコカインはホームズは 7%、つまり少し薄めの溶液を使っていたので、まだ軽度だという設定で、ホームズのエキセントリックな性格を際立たせる小道具の一つにすぎませんでした。正典の中ではワトソンも時々たしなめる程度にしか心配していません。

寄り道が長くなりましたが、『シャーロック・ホームズ氏の素敵な冒険』では、ホームズはついに本物のコカイン中毒患者になっていて、幻覚を見えています。そして個人的な因縁があるモリアティ教授が悪の帝王であると思い込んで、現代で言うストーカー並みに追い回して迷惑をかけています。ワトソンは医者である自分がそばについていながら、かけがえのない親友であり、すばらしい頭脳の実主であるホームズがこんな姿になるのを食い止めることができなかったことを悔やみます。そして自分の後輩であり、『緋色の研究』でホームズと引き合わせてくれた恩人でもあるスタンフォード医師に、コカイン中毒の治療の第一人者がオーストリアにいる、と聞いたワトソンは、なんとしてもホームズをその医師に診せようと決心します。そしてその医師とはあの『精神分析入門』で有名な、フロイトだったのです！ ホームズとワトソンはフロイトの家に滞在し、催眠療法などフロイトが当時はま

だ実験的だった手法をつくしてホームズを診断した結果、コカインに手を出してしまった理由や、ホームズの風変わりな性格を作った家庭的な要因 (!) などが分析されます。やがてホームズ、ワトソン、フロイトの三人組は、フロイトのもとにやってきた別の女性患者をめぐる事件に巻き込まれていくのです……。

プライドの高いホームズに真の理由を悟られずにオーストリアに連れて行くため、ワトソンがマイクロフトに相談したり、悪の帝王でもなんでもなく本当はただの数学教授であるモリアティに頼んで (というより半ば脅して) ホームズをオーストリアにおびきよせるおとりになってもらったりと、豪華なキャストが大活躍し、ホームズ・ファンをにやりとさせる「ツボ」が満載のパスティシュです。

そしてこの作品の成功から、パスティシュに新たな流れが生まれます。ホームズが他の有名人と競演したり、設定や舞台なども奇想天外で大胆な、より自由なパスティシュが次々と発表されるようになったのです。メイヤーは『シャーロック・ホームズ氏の素敵な冒険』の続編『ウェスト・エンドの恐怖』ではホームズに切り裂きジャック事件を捜査させていますが、その後ホームズはドラキュラやジキル＝ハイド博士、ターザンなどありとあらゆる人々と対決をさせられることになっていくのです。

☆ ☆

そんな「自由な」パスティシュの集大成というべきアンソロジーが *Sherlock Holmes in Orbit* (Mike Resnick, Martin H. Greenberg 編) です。編者の一人マイク・レズニックには SF、ミステリ、ファンタジーを書いている作家ですが、ホームズ・ファンであるらしく、この本の前書き *The Detective Who Refused to Die* はレズニックが書いているのですが、見事なパスティシュ史の総括になっています。余談ですが、この人はルーズベルト VS 切り裂きジャックという短編 *Redchapel* も書いています。

Sherlock Holmes in Orbit は 26 人の作家による 26 の短編を収録していますが、大きく 4 つの章に分けられています。「過去のホームズ」「現代のホームズ」「未来のホームズ」「死後のホームズ」です。つまりホームズはいろいろな手段 (タイムマシンに乗るとか、未来の警察組織が迎えに来るとか) で 19 世紀のイギリスからはかな未来、そして天国あるいは霊界にまで出没し、お得意の推理術を發揮したり (しなかったり) しているのです。なにせホームズはミステリー・サークルの謎を解明し、フー・マンチューの訪問を受け、英文学史上とても有名な小さなレディの危難を救い、サイバー空間でサイバー・モリアティを追跡し、

宇宙船の中の密室殺人を解決し、火星にまで足を伸ばし、なんと天国に行つてまで切り裂きジャックを捕まえているのです。一編一編が強烈に個性的なので、どれを紹介すべきか悩むところですが、独断と偏見で選ばせていただき、いくつか紹介してみたいと思います。

まず「過去のホームズ」から二編紹介しましょう。この章はドイルが実際に書いたホームズの時代、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時代のストーリーが集められています。なんだ時代設定は同じか、とあなどつてはいけません。時代はそのままでも内容は十分奇想天外なものばかりです。

The Field of Thermos (by Vonda N. McIntyre) はホームズとワトソンとコナン・ドイルがミステリー・サークルの謎に挑む話です。晩年オカルト趣味にはまっていたドイルを風刺した作品で、ホームズがドイルを苦々しく思っているところがなかなか皮肉です。

ドイルの所有地の中の畑にミステリー・サークル (もちろん <ミステリー・サークル> という言葉は使われていませんが) が現われ、ドイルはこれは霊界から自分にあてたメッセージだと思い込みます。そしてドイルに請われたホームズとワトソンは現地に向かい、現場で捜査を始めるのですが……。

ホームズが解明した真相については霊界の何者かの仕業でも、宇宙人の仕業でもないだけ書いておきましょう。

The Adventure of Missing Coffin (by Laura Resnick) で深夜、ホームズの下に駆け込んできた依頼人は何と吸血鬼です。自分のねぐらである棺桶を盗まれてしまったが、夜が明けるまでにその棺桶の中に戻らないと死んでしまうので、至急探してほしいという依頼なのです。ホームズは鋭い推理力で棺桶の隠し場所を推理し、吸血鬼の危難を救ったのでした。

この吸血鬼はイタリア人で、棺桶をいつもイタリアン・レストランのワインセラーに置いています。また体重を気にしてダイエット中ですし、そもそも棺桶を盗まれる原因も、吸血鬼同士でどちらの手記を出版してもらえるかという争いだということですから、ほんと「やりたい放題」ですね。

次に「現代のホームズ」から。*The Fan Who Molded Himself* (by David Gerrold) は編者マイク・レズニックのもとに謎の原稿が届いたという設定で始まります。原稿に同封されていた手紙の主は冷たい父親に反発しながら育ったという青年です。手紙には早くから独立して一人で暮らしていたが、ある日、居場所さえわからなくなっていた父が突然訪ねてきて、自分が冷たかったことをわび、その原因はこの原稿にあったのだと、一束の原稿を差し出した顛末が綴られていました。

長く離れていた息子に父親はこう語ります。実は青年の祖父がジョン・H・ワトソンの甥であり、ワトソンが残した原稿を受け継いだ。父から息子へと託されてきたその問題の原稿には、ホームズの真の正体が書かれている。そしてそれを持っている者は常に命を狙われることになるのだと。

父が出て行った後、原稿を読んだ青年は真相を知り、自分がいつまでこの原稿を守り続けることができるかわからないので、レズニックに送ったのです。そんなにも秘密にしなければならないホームズの正体とは……！？

「ワトソンの未発表原稿」によって明かされる真相はかなり奇想天外です。青年の手紙に描かれた父と子の対話に味があり、しっかりした説得力があるので、よけいにホームズの正体のトンでもなさが生きています。

「未来のホームズ」からは Moriarty by Modem (by Jack Nimersheim) をご紹介しましょう。この作品の中のホームズは犯罪捜査のために開発されたプログラム「シャーロック・ホームズ」です。

開発されてから 100 年以上たっていて、しばらく使われていなかったのですが、「私」はある理由からこのプログラムを復元します。その理由とは、「私」が「シャーロック・ホームズ」の中に組み込まれていたモリアティ教授の部分のファイルをあやまって復活させてしまい、しかも一瞬のすきをついて、モリアティがコンピューター上からネットワークの中へと逃げ出してしまったからです。モリアティを追跡できるのはホームズしかいないということで、復元したホームズに「私」は事情を話し、追跡を依頼するのですが……。

ホームズという偉大な探偵を愛し、敬意を払う未来人の優しさにすこし心温まる一編です。

そして最後「死後のホームズ」からは編者レズニックの *The Adventure of the Perly Gates* です。冒頭に掲げられているのは「最後の事件」からの引用で、ホームズとモリアティ教授が滝つぼへ落下していく場面を想像したワトソンの記述です。そして一転、今度はホームズの一人称になります。

目の前にあったはずの荒々しいライヘンバッハの岩山は消え、モリアティの姿は見当たらないし、滝で濡れたはずの身体は乾いています。しかも頭上に見える明るい光の方へ身体が吸い寄せられていくのです。そう、ホームズは天国に行ったのです。（ここは天国だ、ということもホームズは誰かに聞いたわけではなく自ら推理して確信します。そしておなじみの『不可能なことを排除していけば、そこに残ったものが、どんなに信じられないようなことでも、真実なのだ』という

せりふがちゃんと出てきます)

しかし天国は、退屈が苦手なホームズにとっては決して楽しいところではありません。何もすることも考へることもない永遠の時間にぞっとしていると、そこに聖ペテロが現われます。そう、聖ペテロはホームズに捜査の依頼をしにきたのです！ しかもそれは、切り裂きジャックを捕まえてほしいという依頼なのです。

聖ペテロによると、精神異常のジャックには自分が犯した罪に対する罪悪感が全くないので、無垢な魂と共に天国に紛れ込んでしまったそうです。しかしホームズ同様、ジャックにとっても天国は地獄のようなところなので、おとなしくしているわけがありません。ジャックの被害者の売春婦のうち 3 人がまだ煉獄にいるのを感じたジャックは、煉獄との間の門を開けて、そちらに侵入しようと試みたようなのです。その時に、煉獄から数人の魂が天国に入ってきてしまいました。ジャックは必ずまた同じことを試みるはずだから、どうしたらジャックを捕まえて、それを未然に防げるだろうか、というのが聖ペテロの相談でした。

ホームズは見事に事件を解決し、そのごほうびとして一つだけ願いをかなえてもらえることとなります。ホームズの願いは決まっていた。退屈な天国にいるよりも、自分の才能を活かし、悪を裁くことができる地上に帰りたい、というものでした。こうして願いをかなえてもらったホームズは、ワトソンの前に再び姿を現わします。

このアンソロジーの最後でもあるこの作品ラストには「空き家の冒険」からホームズに再会して失神してしまったワトソンが、意識を取り戻し、感動のあまり叫ぶシーンが引用されています。ワトソンならずとも、うれしくなってしまうような、余韻のある結末です。

☆

☆

かつてドイルはホームズ人気に辟易して、ホームズという存在をこの世から消してしまおうとしました。けれどその願いもむなしく、結局ドイルはホームズを復活させねばなりませんでした（抗議や哀願の手紙が殺到したようです）。それどころかホームズはドイルの死後も活躍を続け、今に至るまでその活動は続いています。しかも文字通り、様々な時代の様々な場所で、様々な姿になって様々な敵と戦っているのです。天国にいるドイルがこの現状をどう思っているのかはわかりませんが、時空を超え、ジャンルの垣根を越えた、新たなホームズの冒険は、まだまだ私たちを楽しませてくれそうです。

柴田耕太郎著『翻訳力練成テキストブック』

柴田耕太郎著『翻訳力練成テキストブック』は、『翻訳通信』の読者に真っ先に紹介しておくべき本だといえる。柴田耕太郎は先月号まで連載された「誰も教えてくれなかった英語」の筆者だし、内容もこの連載に密接に関係している。連載のもとになった「英文教室」のテキストを一挙に公開したのが本書である。

発売は4月半ばということだが、少数作った見本刷りを一部いただいた。650ページの分厚い本に、「誰も教えてくれなかった英語」でお馴染みの課題が100題並んでいる。まさに壮観だ。

本書を読んでいくと、一種の懐かしさを感じる。40年ほど前には、こういう形で英語を学ぶのが常識だった。徹底した読解と文法解析、これが常識だったのだ。その粋をいま伝えるのが、柴田耕太郎著『翻訳力練成テキストブック』だといえる。

古い、という意見もあるだろう。この意見には、まずは賛成だといっておきたい。それがまさに本書の特徴なのだから。だが、古い、ということの意味をよくよく考えてほしいとも思う。古いというのは、良いことなのか良くないことなのかと。

英語を学ぼうとするとき、だれでも一番良い方法で学びたいと考えるはずだ。一番良い方法というからには、古今のあらゆる方法のなかで一番良い方法でなければならない。新しいから良いとは限らないし、古いから悪いとは限らない。それどころか、良い方法は自然に生き残っていくものだから、古いからこそ良いはずという考え方も成り立つ。だから、古い、という人に対してはこういいたい。それがどうしたと。

だが、古いという意見がでてくる背景はそう簡単ではない。英語教育に関して、この数十年にいくつかの先入観ができあがっている。そのひとつが、読解偏重と文法の詰め込みは良くないというものだ。柴田耕太郎著『翻訳力練成テキストブック』は、徹底した読解と文法解析を特徴としているのだから、まさに「良くない」とされている方法をとっているのである。だから、古いという意見がでてくる。

この点については、単純な事実を考えてほしい。柴

田耕太郎が「読解偏重と文法の詰め込みは良くない」という思い込みが一般にあることを百も承知のうえで、読解と文法解析を徹底して教えようとしていることだ。いまの英語教育では、偏重といわれるほど読解が教えられていないし、文法も詰め込まれていない。だから英語の読み書きの能力が落ちているのだし、小学生程度の英会話はできるとしても、英語でまともに議論できるようにはならない。本書で柴田耕太郎は事実上そう主張しているのである。

たぶん、これまで読解も英文法もまともに教えられてこなかったことは、本書を少し読めば（あるいは、『翻訳通信』のバックナンバーで「誰も教えてくれなかった英語」を読んでいけば）、すぐに気づくはずである。読解も文法も軽視されすぎてきたのであって、その逆ではない。

個人的な意見をいわせていただくなら、本書には若干ながら問題もあると思う。問題とは、「翻訳」に焦点を絞りにすぎていることだ。本のタイトルをみただけでも、本書が翻訳者と翻訳学習者に読者対象を絞り込んでいることがはっきりしている。これだけ分厚く、重い本が、翻訳者や翻訳学習者以外に売れるはずがないと考えるのも無理はないとも思う。だが、本書の内容は決して、翻訳者と翻訳学習者だけに必要なものではない。

いまの世の中では、どのような仕事をしていても、英語を読み書き聞き話す能力がいつ必要になるかわからないといえるほどだ。だれにとっても英語力は必要である。そして、英語を学ぶのであれば、じつは文法と読解が一番の早道なのだとはわたしは考えている。遠いようにみえて早道なのだ。

そういう観点にたつと、本書は「翻訳力練成」のためのものではない。「英語力練成」のためのものである。翻訳のために限らず、英語を学びなおしたいすべての人のための本、それが本書の特徴だと思う。

英文を一点の曇りなく読み解く！

翻訳力錬成テキストブック —柴田メソッドによる英語読解—

柴田 耕太郎 著

A5・680頁 定価(本体9,800円+税) ISBN4-8169-1830-2 2004年4月刊行

翻訳者の実力養成と訓練に最適の100講

■実践的な翻訳技術養成講座

英文を正しく読み解き、等価の日本語に置き換えるという原則に重点をおいて解説した、翻訳者・翻訳志望者のための実践的テキストです。

■100編の名文を読む

古今の名文を一語一語噛みくだくように分析・解説し、訳例・添削例を示す100課題。「翻訳は英語を正しく読み解くことから始まる」という当然のことを、驚きをもって再認識することができます。

Q&A形式のコラム「翻訳の要諦」では、翻訳技法から職業としての翻訳まで幅広いテーマを取り上げ、著者の経験に基づいて翻訳者としての指針をアドバイスしています。

— — — — —

柴田 耕太郎 (しばた こうたろう)

翻訳家・翻訳プロデューサー・翻訳教育者
1949年生。早稲田大学文学部卒。岩波書店嘱託を経て、渡仏し演劇を学ぶ。帰国後翻訳会社アイディに入社、現在代表取締役。インターネットによる翻訳者選定オーディションシステム TranNet や通学制の翻訳者養成スクール(翻訳ジム)を設立。著書に『英文翻訳テクニック』(筑摩書房)、『翻訳家になる方法』(青弓社)、訳書に『フランス現代演劇傑作選』(演劇出版社)、『プレヒト』(現代書館)などがある。

『翻訳力錬成テキストブック』へようこそ

長年、翻訳者の選定を手がける立場として気になっていることがあります。訳文はうまい、でもよくチェックしないとこわい、という人が増えてきていることです。

本書はいままで語学学習でおろそかになっていた「原文を正確に読み解くこと」に的を絞っています。翻訳の技術はファジーでありなかなか普遍化しえませんが、読み解く技術は確実に伝授できると確信します。

ここに集めた100編の小文はいずれも執筆者が高校・予備校・大学の学習課程で、また社会で翻訳の実践を積むうえで、さらに最近では翻訳の指導を通じて、自ら取り組み、感銘し、味読し、力をつけるのに役だった文章からの抜粋です。

語法的にきっちりとし論理性のある、評価の確定した名文家の文章ですから、学習に最適なものと安心して挑んでください。

柴田耕太郎

「翻訳力錬成テキストブック—柴田メソッドによる英語読解—」

まえがき(一部抜粋)より

◆オンライン予約受付中 <http://www.nichigai.co.jp/sales/shibata-method.html>

英語を学びなおしたい人に絶好の再入門書——山岡洋一

日本の英語教育は読解偏重、文法の詰め込みだから良くないといわれている。柴田耕太郎著『翻訳力錬成テキストブック』を学べば、この常識がいかにも間違っているかを実感できるだろう。

読解も文法ももともとは教えられてこなかった。だから英語を何年学んでも、読み書きも会話もできるようにならないのだ。

柴田耕太郎著『翻訳力錬成テキストブック』は英語を学びなおしたい人に絶好の再入門書だ。

ご注文・お問い合わせは・・・

日外アソシエーツ 営業本部

〒東京都大田区大森北1-23-8 第3下川ビル TEL. 03(3763)5241 FAX. 03(3764)0845